蜂窩見聞志 二編 七

へ逓13
2475
52

内閣13
2473
52

參議之章

陸奥見聞志三篇巻之七

一 美濃村松湯ヶ行程論義の事

花 朝陽寺三世義秀ト伏の夏

一 泰門令弟朝門ト論義乃夏

花 おくのほそ道名所旧跡の夏

なんと思ひきや義秀が情なくも
て此方と止足助をも
よう姫をも
きこう急ぎもおんとうそ彼局
まで今ハ慕乃
義秀が詞ぐさ
も思ひ出も再び
いぶハ去ぬ
ゆえよう
ハいうまして彼局と今ハ
熱傷ひ
利生

…義村等が相…
…和田乃一族らが…
軍七乃至…
捕えらるゝ…
…局の…
…先…
…軍軍…

…義盛早速…
…軍の…
…虜人吟味…
…秀衡…
…秀衡勅書して…
…聞そのとき…
…没人…
…義秀奉…

この上ぞなもう一度
そうぐらこしが勢多の
松の御奉と初うら
旦じ通り吟味せん
ものでも義秀父の
ごとく寿命義秀
て御ぢ義盛と義
おおとうぐいとかの
とかう捕うぐ
行事で生捕うぐ
捕いうも私うち
その捕へうぐ
ひおを曲うもの

松の枝より一度
勢多の通り
その罪な
ひぐ
やん
義盛
局の
早速
大ぶ勢
局の
曲右
放ち遣
義秀
度々
甚
放ち遣
局と奪
返す事

支乃斗ふ所ん阿ら
小通電一ら局ら湘江註ひの至るハ
ゐ宝ら匹夫乃海へ
思ーめらが也え彩子湘通とゐうゐ墓
小作ら年ら而ら彩治兼ら帝ら沈
言別面碗ら乃ら湘ら
ゐーぬらが汚ゐと夫一世の

加辱ら多事ハ春の時ーとるゐ
眼く海とうゐ之中ら
り又乃巻ら先ゐ
春ーら紀元湘通ーめ
ら元ん句之経式ら
秀ら加辱ら仕ゐ
ら式ーら年ら

常沢村南の客舎に
壮士ら会して酒宴を催し
会終りて各〻村々の壮士の
局に当る者出でて幕を引
張りて各〻席に着く
幕を引張りて後村内の壮士
酒を飲み机を叩きて壮士の気を
奮ひ立たしめ
幕を引張りて後
村内の壮士の気
奮ひ立ちたる
頃を見計らひ
幕を引張りて
後村内の壮士
の気奮ひ立ち
たる頃を見計
らひ幕を引張
りて後村内の
壮士の気奮ひ
立ちたる頃を
見計らひ幕を
引張りて後村

なども審らかにして秘宝を奪
みその小卵をも残
ものハ一旦乃煩悩
福汉ものを落
その真をいまだ尽
なく表刑をまぬ
局を汚名を負
活基のおもむきを納
三ツの法華の経
を換ふ夏も
斗うんを返
て引き出さ
お勤を励し
局を汚名を負
活基のおもむきを納
三ツの法華の経
を換ふ夏も
斗うんを返
て引き出さ

おとし高を和屋と
かきくゑ君のゐ高一ツ
ちくらも名護乃汲
うたゝゑ海へ
もゝも西乃申小
名ゐく夜時
仕もゐゑ

らおかしうよ思えぶも杉龍ありぬ史
断而利雪の廣元そ向い五史の多うあ六
揚岡そうもやまぶしの氏ら局の直所
初まさまぶ嘉南ら揚が那くもふふ
羅科よ而一ま小揚而まや
上言ば向いもるしい廣元
いるぶ小見ら延答ら南多て智く工

史有ふ小蘇素附ありて氏ふ
向い美多乃ふ一ふ
貴ら井氏ハ船ら延
松ら玉秀のもぐふ
松ら多ら張ら局と送ら返
見合ま小ハ物ら一ふ里と
ふ多ら嘉附

中陸義村より手紙を義秀の
見ぐ
玲瓏と申ものゝ文の義村が決意を
うかゞ義盛を籠絡
せんと書しを漏
聞軍乃ものゝ廣
利鎌乃如くじもの
ゆうは
義村が如き乃ぶ
もの
義盛を亡さ
ずば
ならじ

びとの傷んだを見てあ
わいそうに真二条一
乃一命お助申ようと仰
ん
奸佞土戒紀を問ハあ
ものゆえとが共
また申ます上軍の